作業所学会分科会　記録者用　事例・活動報告書

記録者名：　石上　直彦
（事業所）　安倍口作業所
役　　職：　管理者

発表者名：　片貝里絵
（事業所）　みどりハイツ
役　　職：　サービス管理責任者

【発表事業所の概要】

事業区分	共同生活援助
定員	12 名
活動内容	本体 10 名サテライト 2 名 知的。身体・精神・発達に障がいのある方の支援

【支援・活動対象者の概要】

性別	男性 3 名、女性 1 名
年齢	10 代、20 代、40 代、60 代
障害の種別・特性	知的 40 代、注意欠陥傾向 精神 10 代、リストカット多数 知的 60 代 精神 20 代、地活利用中

【支援・活動事例の概要】

目標・目的	ご本人の住みたい所に住みたいという想いを叶えるためにどうすべきか？ ご本人の自己決定、自己選択を尊重し、それを支援する。
計画・手段	面談で１人１人時間をかけて本人の想いを聞く。 相談支援員と連携し、ご本人の想いを叶えるためにはどんな事が必要か洗い出しを行う。 一般的に必要と思われている１人暮らしの条件が本当に必要な事かを検討する。 インフォーマルなサービス、特に地域の社会資源の活用を検討する。
内容・経過	ヘルパーの手配、配食サービスの利用、家電の購入やアパートの見学、不動産屋との情報交換を行う 成年後見制度の申請手続き、高校受験を希望している利用者の家庭教師を探す。 同一法人内の相談支援センターうぐいすと面談を一緒に行うなどして情報交換と支援方針を共有する。 日頃から地域の清掃、祭り、会合に参加し地域との関係作りを行う
結果・課題	〈結果〉 これまでの支援の中で１人暮らしは出来ないと周囲も自身も思われていた方が環境を整える事でH29 年以降で 4 名グループホームを卒業され、現在も本人の住みたい場所で生活されている。 相談支援員と支援方法を共有する事でスムーズでスピーディーな対応ができた。 〈課題〉 支援者が変わる事や環境が変わる事への不安とその対応。 職員への業務のやりがいと負荷のバランス、職員の定着。 成年後見制度の手続きのタイミングと成年後見人との考え方の調整。 入居者の入れ替わりで長期入所中の方が落ち着かない。

【意見交換】

（事例からテーマを抽出して）

Q「地域との関係づくりに於いて工夫されている事はどんな事か？」

A：①地域の清掃、祭りに参加、話し合いにも利用者が参加する。

②民生委員や不動産会社との関係づくりを行う

③地元の議員に自分達の活動について知ってもらう。

Q「グループホームから単身に移行した後どうなったか？またグループホーム卒業後の支援体制は？」

A：皆特に問題なく過ごせている。支援の工夫としては卒業の際に障害福祉サービスを入れ、相談支援員との関係を途切れさせないようにしている。また、卒業後も何かあれば相談を受け付けている。（ただしエンドレスにならないように）

Q「家族や法人の考え方との本人の想いとに相違がある場合の調整はどうしているのか？」

A：支援者から本人の想いと今の状況、卒業した後の支援体制等を示し理解いただいてもらっている。

その他意見といて

① グループホームを持たない事業所職員より、利用者および家族の高齢化に伴い、親が元気な内に親亡き後の生活の見通しをどうしていくのかが課題となっているが、実際進んでいない。

② 現にグループホームを運営している事業所職員より、利用者の高齢化による生活能力低下により介護が必要な状況となり、その事が原因で本来の仕事と内容が変わる事への不満から職員の退職に繋がってしまっている。ただ一方で、長年グループホームを利用していた利用者であるからこそ支援は続けたいという想いもあるのでどうしたら良いのか？

【まとめ】

（テーマに対する分科会としての結論や方向性）

・グループホーム＝終の棲家ではない。

・支援者が本人のどうしたいかの気持ちを否定せずにどうすれば本人の想いが達成できるのかを考える。

・フォーマルなサービスだけでなくインフォーマルなサービスを活用する方法を考える。

・ひとり暮らしが出来るための条件と思われている条件が本当に必要な条件なのかを考えてみる。

・住みたい所に住むのは、ごく当たり前の事である。住みたい所に住めないから問題行動を起こす方も居るのではないか？

・色々な職種の方が同じ考えを持って支援に充たる事が重要である。